

『隠蔽された歴史の闇の中の真実。コロ島撤収作戦決行までの道』
基礎知識篇その二十二——空母編、後編の第十六部

歴史研究者にとっては、しばしば予期しなかった幸運が訪れることがあります。未発見の重要資料の出現です。

愛甲文雄大佐が熱心に集積保存し、長男で最後の海兵七十八期生だった愛甲一郎がまとめて残した略称「愛甲文書」がその役を果たしました。

ここで明確に示された驚愕の事実は、これまでの太平洋戦史の多くを根底から覆すもので、もちろんソロモン戦もその例外でないばかりか、むしろ最もその本質に迫る重大事実だったのです。

ソロモンの島嶼戦では、米海軍は機動部隊の増強と、海空部隊それぞれの訓練を最終目標とし、最前線はハルゼーの率いる海兵隊を中心に、その専属のF4Uコルセア戦闘機、それに陸軍航空隊の全面支援を得ていたのに対し、日本軍は島嶼戦では全く無力の陸軍機を欠き、乏しい海軍航空戦力だけを酷使し続けていました。

しかもその時期に大本営は二つの重大な誤判断を犯しています。その一つが「絶対国防圏」の設定で、一つが航空機生産の陸海同数の決定であり、いずれも現実を全く無視した虚構の決定に終わっており、これが真の敗因となりました。——（既述のとおり）

混迷する大本営の基本戦略。一貫した米軍の作戦

自分の国の陸海空の戦力さえ正確に把握できていない大本営が、刻々と変動する現地情勢を的確に判断し、必要な兵力を配分するという最も基本的な戦略を決定できるわけがありませんでした。

こうして現地部隊は、「最初から絶対に解ける」との「ない課題」を与えられて、日一日と窮地に追い込まれてゆきます。

海軍に加えて陸軍の指揮も受けるという立場の種子島少佐は、とりわけ辛い思いをすることになります。彼の著書には、時に海軍批判があり、また中央の作戦批判が頻繁に見られますが、大本営の方針自体が当初から矛盾を孕んでいるのですから、むしろ当然といえるべきでしょう。

たとえばソロモン方面の戦いの焦点となった三つの重要地点、ムンダ飛行場とコロ島、ラバウルについて、陸軍は早い段階で、補給困難な最初の2地点を放棄し、補給が容易なラバウルに集中すべきだとするのに対し、海軍がムンダ飛行場奪回に固執したので、陸軍も一万人以上の大軍を投入する結果となった、というのが「陸軍」側指揮官とされた種子島少佐の所論となっています。

これは戦後の諸情報を総合すると、判断時期についての混乱と、情報源の偏りに起因する誤認と考えられます。

陸軍の中枢部が当初はガ島撤収に強く反対し、撤収後もしばらくは「ガ島奪回」の方針を変えていなかったのは事実です。またその目的の為に前進基地としてのムンダ飛行場が不可欠の存在であるという海軍の主張も当然です。孤立した飛行場ではその機能を完全に果たすことは不可能だからです。

この時期にはまだガ島奪回論は完全には消えておらず、しかもそれはむしろ陸軍側の主張ですから、陸軍のラバウル後退説というのはムンダ防衛が困難となった時期に発生した説と見るべきです。

しかもこの説には戦略論の根本的な誤りがあり、同時に事実認識としてもほぼ完全に否定されます。

まず戦略論としては、全く孤立した島は、どんなに堅固な要塞を建設しても長期間維持するのは不可能だという事実です。攻撃側は航空部隊による爆撃、大型艦による艦砲射撃、どれも選択し、無制限に攻撃を続けることが可能です。

それに対して、守備側は追加補給が不可能ですから、戦力を保持できる時間には必ず限界があります。

事実誤認についてはさらに明快です。日本軍がムンダ飛行場保持を断念し、コロ島方面に兵力を集中し始めた直後、連合軍はコロ島を跳び越えてベラ・ラベラ島に大軍を上陸させ、一気にラバウルに迫る動きを見せたからです。しかも歴史が証明するように、これも完全な陽動作戦で、すでに米軍はラバウル攻略作戦自体の放棄を決定していたのでした。

米軍がラバウル攻撃を回避したのは、カートホイール作戦が順調に進行し、ニューギニア方面のマ将軍が、彼の指揮下に海軍の第七艦隊を得て、リープフロッグ（蛙跳び）作戦で順調に比島方面に進撃できる見通しがついて、多くの犠牲と時間を費やしてラバウルを攻略する価値が消滅してしまったからです。

この判断は実に見事なもので、大本営がこれに気付かなかつたのを責めることはできません。しかしすでに制空権も制海権も失った現地部隊が窮地にあるのは事実ですから、何らかの緊急対策を講ずることと、米軍がリープフロッグ作戦を採用の可能性を検討するなど
の対応を、総合的な作戦指導を行うべき中枢部門から伝えられてこないのは、余りにも怠慢というしかありません。

そればかりか、全く実態のない「絶対国防圏」のような無意味で

有害な作戦指導をしているのですから、現地部隊の不満が増すばかりなのは当然のことでした。

しかしガ島撤退作戦の前後、山本五十六と彼の幕僚たちが、心血を注いで作戦を練り、大本営を説得し、予想を遙かに下廻る犠牲で計画を成功させた実例を知るだけに、現地の第八艦隊とその水雷部隊に対応を押しつけた印象のある海軍の首脳部の指導力にも疑問が残ります。

前回、「外南洋機動舟艇部隊」が正式に発足したのを九月十三日とした際、大本営での扱いが不明としましたが、実は種子島氏とは別の証言があり、海軍内部にも混乱があったらしいのです。

たとえば、当時の海軍側の特別陸戦隊の総隊長であった大田実少将の伝記での記載事項からもそれを窺い知ることができます。

大田実と言えば、あの沖繩戦での海軍側の実質最高指揮官で、戦史を語る人が決して忘れてはならない「沖繩県民斯克戦へリ 県民ニ対し後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」の電報を残して自決したあの人物です。

光人社版の彼の伝記には詳細な軍歴が添付されていて、そこにはコロ島撤収戦以前に海軍特別陸戦隊指揮官であった彼の行動が記されています。その隊名が「八連特」。第八艦隊連合特別陸戦隊の略称です。その軍歴では、この時に八連特が陸軍傘下に入ったとしています。この後の七月四日には陸海軍間でトラブルがあったことと、さらに八月四日には陸海軍の合流が白紙となったという不思議な記述があります。

実はこの七月四日と八月四日というのは、この方面の作戦全体にとって極めて重要な意味を持つ日でした。

まず七月四日の前日、この地区の陸海軍の責任者による重要な協議が行われました。陸軍は南東支隊長の佐々木登少将、海軍は大田実少将。大田少将は海軍の航空戦力は、戦闘機10、爆撃機40、軽攻撃機30しかなく、駆逐艦の残存数も14隻のみであり、陸軍の大軍を輸送する余裕のないことを説明しています。

これは六月三十日にレンドバ島に上陸した米軍が早くも重砲陣を構築して日本軍の陸上部隊を砲撃しており、一方を越える部隊が身動きもできない、ここに至っての唯一の局面打開策は、海軍側の協力を得て、レンドバの敵陣への逆上陸の奇襲作戦しかない、どうしても海軍の協力を得たいというのです。

佐々木少将としては、駆逐艦が捻出できなければ、陸海それぞれ

が大発を手配して、敵陣に夜襲をかけてもというのですが、大田少将は「海軍にも大発の余裕は三隻しかない」とこれを謝絶します。彼の本心にはこれまでの陸軍の行動に対する批判が隠されています。海軍が絶大な犠牲を払って兵員と火器、食料を輸送しても、装備が劣悪でただ突撃するだけの陸軍では、最初から悲惨な結果が分かっているという判断です。

すでに米軍のレンドバ重砲陣地は完成しています。そこに貧弱な装備の歩兵部隊の奇襲作戦など、自殺的行為に過ぎません。

これは歴戦の戦士である彼にはもちろん、海軍の上層部にも充分分かっている自明の事実なのです。

こうしてこの会談は一旦決裂し、何回かの再討議の結果、当初の予定日を翌日に延期することで妥結。しかもこの間の両者の討議の電報の内容を傍受していた中央の司令部が、実行を促す電報を二度も打電してきました。当然現地海軍司令部は完全無視です。

その代わりに決行されたのが、レンドバよりは防備の薄いコロ島への陸軍部隊の輸送任務で、これが七月四日、五日、六日と三回にわたって反復して遂行されました。四日は前哨戦、五日には戦艦伊勢、日向の14インチ砲を陸揚げして米艦の艦砲に対抗。一隻を大破、一隻を爆雷で撃沈との記録が残っています。

七月六日が既述のクラ湾夜戦のいわば本戦で、護衛隊3、第一輸送隊3、第二輸送隊4の計10隻の駆逐艦隊で、陸軍兵2400とその装備一式を輸送し、旗艦新月と司令官秋山輝男少将を爆沈死で失い、帰還途中に長月も撃沈されました。
(米艦隊は軽巡ヘレナ沈没)

その三日後の七月九日は、戦史として記述されることも稀な、重巡「鳥海」まで参加した軍艦による緊急輸送隊の出勤の日です。

ブインの基地を出撃した輸送艦隊は、警戒隊が重巡鳥海、軽巡川内、駆逐艦は雪風ほか三隻。輸送隊三日月ほか三隻。輸送する陸兵1200、物資65トン。任務を無事遂行してブインに翌十日に帰着しています。

さらに三日後がああ伊崎俊二少将率いる第二水雷戦隊の奮戦が記憶に残る七月十二日のコロバンガラ島沖夜戦です。

この海戦については、旗艦である軽巡「神通」が敵艦隊のほぼ全弾を一身に引き受けるという壮絶な「囀り」となって、雷風以下のわが駆逐艦隊に勝利の戦果を呈上しました。輸送隊の成果は陸兵1100、物資100トン。

ところがコロ島に上陸できたわが陸軍がほとんど身動きできないのです。米軍重砲陣の威力は凄まじく、日本軍が小型砲を一弾発射すれば何十発も反撃してきます。補給の桁が違うのです。

米軍はすでに制空権を確保していますから、戦時の大增産計画によって急速に隻数の増えた輸送船団が大量の武器・資材を運び込みます。駆逐艦の片手間輸送で対抗できるものではありません。

しかも輸送隊に何隻かを割けば、もともと数で劣勢の戦闘部隊の戦力が大幅に削減されるのは必然的な帰結です。

この時期の海戦についての戦後の海軍関係者からの論評の中で、この最重要事実を指摘する者が皆無に近いのは、不当というしかありません。この事実と比較すれば、しばしば強調されているレーダー開発の遅れなどは、現実に逆探と夜戦とで或る程度は対応可能であり、現にコロ島沖夜戦では雪風ら四隻の駆逐艦隊が、夜陰に乗じて敵艦隊に接近攻撃を決行し、数でも戦力でも圧倒的に優る相手の巡洋艦隊と駆逐艦隊に致命傷に近い大損害を与えています。

もしもこの時、輸送隊の四隻が攻撃に加わっていたならば、米軍の損害はさらに拡大し、米軍の巡洋艦のうち何隻かは撃沈され、さらに駆逐艦のうちの数隻も葬り去ることが可能だったでしょう。現実には多くの戦場でその種の戦機は失われていました。

ムンダ飛行場撤収へ

大田中将伝記の八月四日の項で、陸海軍の合流が白紙と記述されているのは、不可解というしかありません。

これ以前に陸軍・海軍それぞれが合流を前提に各隊の編成を行っていたのは間違いない事実ですし、しかもこれ以降もその態勢は公式には維持されている筈だったからです。

どうやら八月四日のムンダ撤退に関して、陸海軍に意思の疎通を欠く事態が発生していたようなのですが、その詳細を記録した文献はこれまで未見です。

当時、ムンダに残っていた日本軍は、陸軍1600、海軍600という数字が記録されていますが、それだけでは対岸のレンドバの米軍の重砲陣の大規模砲撃に対抗できないのは明らかですから、撤退そのものに意見の相違があったというよりは、その撤退方法に関する確執というのが最も近い真相と推定されます。

この件に関しては、種子島少佐の著書にある陸軍側代表の南東軍佐々木支隊長の行動についての記録が真相を示唆しています。

彼は、自分の指揮官である海軍の第八艦隊司令長官宛に、七月二十六日、敵の砲・爆撃で窮地にあるムンダの味方部隊の現状を訴えて迅速な対応の指示を求めています。

本来ならば、このあたりが大本営の最後の決断の機会でした。

現地部隊が窮地に立たされるに至った根本の原因が、日本軍が制空権を失い、補給のための最後の頼みの綱が駆逐艦輸送となつてしまったのに、その非常手段も限界に至っているのはみな気づき始めていたのです。

それが八月六日のベラ湾海戦の悲劇を招く結果となつてしまったのでした。

ベラ湾海戦

(Battle of Vella Gulf)

ベラ湾のベラは、ベラ・ラベラの英文名ベラと同じです。それから分かりますように、この湾はコロ島からベラ・ラベラ島への通路になります。八月十五日には、米軍はここに蛙跳びしています。

八月六日の夜、ここでの夜戦で、わが輸送隊の萩風、嵐、江風と警戒隊の時雨は、待ち受ける三隻の隊列が二本並行して走る米軍駆逐艦隊に挟撃され、時雨を除く三隻を撃沈されました。

警戒隊が一隻だけの日本側の敗北はむしろ当然なのですが、当ても戦後も、なぜかこの海戦を正式に海戦と認定せず、損害の事実だけを記録するという対応に止めていました。

この夜戦が極めて重要な意味を持つていることが判明したのは、戦後かなり経過してから、ニミッツの著書で言及されたり、その他の文献でも重要海戦と紹介されてからです。

これらによれば、米海軍は一時はリーダー使用で優位に立ったものの、日本軍の逆探と夜戦がそれを無効化することを知り、至急対策としてこの海戦で新戦法を試行し、成功していたのです。

発案者は、三十一ノットのバークと異名を持つあのアーリー・バーク大佐。戦後は米国の作戦部長として日本の海上自衛隊の最大の理解者となった重要人物です。

彼はその後十一月二十四日からのセントジョージ岬沖海戦で、自ら五隻の駆逐艦隊を指揮して、日本の駆逐艦隊の至宝とされた吉川潔大佐率いる五隻の輸送艦隊と対戦。バーク大佐の新戦法を知らされていなかった吉川隊の三隻を撃沈し、完勝しました。

結局、この海戦の敗北が大発使用によるコロ島撤収を決断させました。

—— 以下次に続く